

図説 経済学体系 7

日本経済史



竹中靖一 編著
作道洋太郎

学文社刊

経済学体系 7

日本経済史

竹中靖一 編著
作道洋太郎

学文社刊

編者紹介

たけなかやすかひ
竹中靖一

昭和4年 京都大学経済学部卒業
昭和39年 学士院賞受賞
現在 近畿大学教授(商経学部)
主要著書 『石門心学の経済思想』(ミネルヴァ書房)
『日本経済史』(ミネルヴァ書房)
『日本商業史』(ミネルヴァ書房)

きくどうよう たろう
作道洋太郎

昭和22年 九州大学法文学部経済科卒業
現在 大阪大学教授(経済学部)
主要著書 『近世日本貨幣史』(弘文堂)
『日本貨幣金融史の研究』(未来社)
『近世封建社会の貨幣金融構造』(塙書房)

図説 経済学体系7

日本経済史

昭和54年3月1日 第一版発行

昭和57年3月30日 第四版発行

検印
省略

竹中靖一
編者 作道洋太郎
印刷所 株式会社 チューエツ
製版所 企画・スギタニ
発行所 株式会社 学文社
代表者 北野登

東京都目黒区中目黒1-2-6

電話 (715)1501(代) 振替東京3-98842

(落丁・乱丁の場合は本社でお取替します) 定価はカバーに表示

ISBN4-7620-0020-5

は し が き

「図説経済学体系」の1巻として、日本経済史の編集について、佐藤武男教授を介して、学文社から要請をうけたのは昭和45年の初夏であった。そこで、作道洋太郎教授の協力を懇請し、神木柝男・岩橋勝・堀切善雄・衣本篁彦の諸氏にも執筆を依頼した。「日本経済史」と名のつく著書はすでに数多く刊行されているが、色刷りの図説という特色を生かすとともに、原初から最近までの歴史的推移をできるだけ細かくわけて跡づけるところにも特色を出そう、という方針をたて、竹中と作道とが編序の原案をつくり、執筆分担を古代・中世編竹中・神木、近世編竹中・作道・岩橋、近・現代編竹中・作道・堀切・衣本と定め、しばしば打合せ会を開いて、各執筆者の意見を徴し、相互の意志統一をはかったうえで、それぞれ自由に執筆した。しかし、全体を統一するために、竹中がいちいち文章に手を入れただけでなく、内容についても、執筆者の同意をえて、そうとう思いきった調整を加え、加除したり、書きなおしたり、ときには構成をも改めたりしたところが多い。だから、叙述内容についての最終責任はまったく竹中にあることを明記しておく。

全体の紙数に制限があるうえに、できるだけ図表をたくさんとり入れるために、叙述を簡潔にしたので、じゅうぶんな説明ができず、また、ときどきは項目を割愛したところもあり、かならずしも執筆者や編集者の意にみえない点がそこそこにあるが、大方のご叱正をえられるならば幸甚である。1人でも多くの人がとに読んでいただくために文章はできるだけ平易にし、わかりやすい表現をつかったつもりである。だから、大学における講義のテキスト用としてのほかにも、一般にひろく利用して下さるならば、このうえもないしあわせである。

概説書であるから、本文はもとより、図表についても、先学諸彦をはじめ多くの研究者の業績をつかわせていただいた。その学恩に深甚な謝意を表するとともに、本文に出典を註記しなかったことについて、ご寛恕を乞うしだいである。中扉や本文の写真などについては、造幣局・林野庁・森林経営研究所・三和銀行ならびに創元社からご厚意をいただいた。あつくお礼を申上げる。参考文献は主として神木・岩橋・衣本の3氏に選んでいただいて、作道氏に編集の労をとってもらった。年表は竹中の原案に各自の意見を入れ、索引は岩橋氏をわずらわした。岩橋氏の担当部分は早く完了していたが、他の部分は執筆者の病気などのため、原稿がずいぶんおくれて、学文社に迷惑をかけた。同社社長北野登氏には出版にさいしていろいろお世話になった。記してお礼を申上げる。

なお、本書は、昭和47年にB5判『図説日本経済史』として刊行されたものであるが、このたび読者諸君の勉学上の便宜を考慮して新たにA5判で刊行することとした。

昭和54年1月

竹中靖一記

目 次

緒 言

実証史学の立場（2） 歴史的推移と現代の意義（2） 幕藩制社会と近代社会（2） 歴史における必然性と偶然性（3） 時代区分について（4） 経済史と政治史，文化史，その他（4）

I 古代・中世編

i	氏姓制度下の経済生活……………	6
	原始共同体（6） 大和朝廷による統一と氏姓制度（7） 労働の編成（7） 生産の発達（8） 経済の組織（9） 市と対外関係（9）	
ii	律令体制下の経済生活……………	11
	大化改新と律令体制（11） 国家組織と社会体制（11） 班田収授（12） 財政制度（12） 農耕生産（13） 工作生産（13） 東西市など（14） 銭貨の鑄造（14） 朝貢貿易（15） 貴族の生活（15） 農民の生活（17）	
iii	荘園経済の展開過程……………	17
	墾田の進展（17） 開墾の状況（17） 初期荘園の性格（18） 墾田地系荘園（18） 雑役免系荘園（19） 寄進地系荘園（19） 荘園制社会（19） 荘園経営の人的要素（20） 荘園の土地構成（21） 荘園の景観（21） 荘園制度下の農業（22） 荘園領主の経済（23）	
iv	荘園経済の変質過程……………	23
	守護・地頭（23） 在地領主制の展開（24） 荘園領主経済の変質（25） 商工民の独立と座の発展（25） 座の組織と機能（26） 問丸と隔地間取引の展開（26） 日宋貿易と倭寇（27） 貨幣経済の展開（28）	
v	守護領国の成立と経済的变化……………	31
	南北朝の動乱と守護の大名化（31） 農民の分化（32） 惣の成立（33） 貨幣経済の進展（33） 勘合貿易（34） 自治都市の成立（35） 土一揆（35）	
vi	戦国大名の領国経済……………	36
	戦国大名の出現（36） 領国の支配体制（37） 貫高制と検地・人改め（37） 富国強兵政策（38） 分国法の制定（40） 農村と農民（41） 城下町の形成（41） 商品流通の発展（42） 南蛮貿易（43） 戦国大名の歴史的意義（43）	

II 近世編

i	織豊政権の成立	46
	近世の意味 (46) 信長政権の性格 (46) 撰銭, 楽市・楽座など (47)	
	秀吉政権の性格 (48) 太閤検地の歴史的意義 (49) 都市と商人 (50)	
	秀吉の外交貿易政策 (50)	
ii	幕藩体制の成立	51
	幕藩体制の構造 (51) 幕藩体制の経済的基盤 (52) 農民の性格と農村の構造 (52)	
	都市と流通機構 (53) 朱印船貿易から鎖国へ (55)	
iii	幕藩制経済の展開	57
	幕藩体制の定着 (57) 農民余剰と農業生産力 (57) 小農の自立と名田小作 (59)	
	商業的農業と分地制限 (59) 幕府の商業政策 (59)	
	水運と全国の商品流通 (60) 中央市場としての大坂 (62) 問屋と両替屋の発達 (63)	
iv	元禄期の繁栄	64
	農村構造の変容と商業的農業 (64) 商品流通機構の整備・拡大 (64)	
	酒造業の発展 (66) 元禄の貨幣改鋳 (67) 近世の商家 (68)	
v	享保期の経済政策	69
	享保改革の歴史的意義 (69) 官僚機構の整備 (70) 農村政策 (70)	
	商業政策 (71) 通貨政策 (75)	
vi	宝暦・天明期の市場構造	76
	中央市場の独占体制 (76) 大坂市場と各藩市場 (77) 諸藩の専売制 (79)	
	幕府の専売 (79) 信用体系の展開 (80) 幕府の公金貸付 (81)	
vii	田沼時代の経済的動向	81
	農民層の分解と地主制の動向 (81) 百姓一揆の展開 (82) 田沼期の経済政策 (83)	
viii	寛政期の経済政策	86
	寛政期の農政 (86) 市場統制の実施 (88) 江戸町会所の設立 (89)	
	物価政策の強化 (89) 寛政期の貨幣問題 (90)	
ix	化政期の経済変貌	91
	江戸と大坂との経済関係 (91) 大坂市場独占体制の動揺 (91) 江戸市場強化策 (92)	
	江戸地廻り経済圏の形成 (93) 諸藩の動向 (95)	
x	天保期の経済危機	96
	天保期の歴史的意義 (96) 地主・小作関係の展開 (97) 新しい全国	

4 目次

市場の形成 (97)	国訴の新展開 (98)	大塩の乱 (98)	幕府の天保改革 (98)	株仲間解散 (99)	雄藩の天保改革 (99)
xi	開国と経済構造の変動				100
開国の意義 (100)	貿易の特質 (101)	貿易の影響—物価騰貴— (101)	流通機構の再編成 (102)	幕府の貿易対策—「五品江戸廻し令」— (102)	
生糸・絹織物と綿業 (104)	貨幣制度の混乱 (104)	民衆闘争の激化 (105)	維新への道 (105)		
III	近・現代編				
i	明治維新と経済的変革				108
明治維新の歴史的意義 (108)	王政復古と王政維新 (108)	経済活動の自由化 (109)	新政府の財政的基盤 (109)	地租改正 (110)	秩禄処分 (111)
貨幣制度の近代化 (111)	国立銀行の設立 (112)				
ii	工業化への準備				113
工業化への準備過程 (113)	紙幣整理とデフレーション (114)	官業払下げと政商資本 (115)	鉄道・海運・通信 (116)	貿易の組織化 (117)	
近代的企業家の性格 (118)	大阪紡績の発足 (118)	賃金労働者の形成 (119)	農民の階層分解と寄生地主制の確立 (120)		
iii	産業革命の展開過程				121
日本の産業革命 (121)	綿糸紡績業 (121)	製糸業 (123)	織物業 (123)	製紙業 (124)	その他の産業 (124)
貿易の拡大と原綿輸入 (125)	貨幣金融制度 (126)	工業化と農村の動向 (126)			
iv	産業資本の確立				127
産業資本の確立 (127)	金本位制の実施 (127)	紡績業の発展と原綿の確保 (128)	製糸業と織物業 (129)	製紙業と製糖業 (130)	鉄鋼・造船・機械・電力 (130)
交通・通信部門の発達 (131)	貿易の発展と商権回復 (131)	銀行業の発達と外資の輸入 (132)	経済発展と農業経営の変化 (133)		
v	日露戦争後の近代産業				134
近代産業の成長 (134)	紡織および製糸業 (134)	重工業の発展 (135)	貿易の伸長 (136)	寡占とカルテル (136)	財閥の形成 (137)
輸入と資本輸出 (138)	工場法の制定 (139)	地主制の動向 (139)			
vi	第1次世界大戦と日本				140
世界大戦の影響 (140)	貿易の躍進 (140)	海運と造船業 (141)	紡織・製糸業の盛況 (142)	重工業の拡張 (143)	化学工業の発足 (144)
農村の繁栄と産業組合 (145)	労働運動と米騒動 (146)				

vii 慢性不況と巨大企業	147
恐慌と不況との11年(147) 戦後恐慌と慢性不況(147) 金融恐慌と銀行資本の集中(148) 産業合理化と金解禁(149) カルテルとトラスト(149) 紡績連合会と綿花商(150) 財閥の成熟(151) 電力事業と化学工業の確立(151) 労働運動の展開(152) 農村不況と農民運動(152)	
viii 満州事変下の日本経済	153
満州事変と日本経済の転換(153) 財政の膨張(153) 産業構造の高度化(155) 輸出ブーム(155) 国民経済の構造(155) 世界経済と日本の貿易(156) 海運業の成長(156) 軽工業の成長(156) 重化学工業の発展(157) トラスト・カルテル・財閥(157) 跛行景気と二・二六事件(158)	
ix 軍国経済の進展と崩壊	159
日華事変と戦時経済統制(159) 戦時経済の枠組(160) 長期持久体制(160) 「大東亜共栄圏」と経済新体制(161) 産業再編成と生活物資の統制(161) 太平洋戦争への突入(161) 軍需生産の強行と大企業(162) 戦時経済の窮迫(162) 労働力の総動員(163) 農業の再編成(163) 国民生活の低下(165) 敗戦と破局(165)	
x 占領下の経済改革	166
敗戦の混乱と占領政策(166) 農地改革と農業協同組合(167) 労働三法と労働運動(167) 財閥解体(168) 悪性インフレーション(169) 経済安定本部と復興金融公庫(169) 占領政策の転換(170) ドッジ・ライン(170) 単一為替レートの設定(170) インフレーション収束と安定恐慌(171)	
xi 日本経済の再建・復興	172
朝鮮動乱と日本経済(172) 日本の独立と国際社会への復帰(173) 産業合理化(173) 近代化投資(173) 設備資金の調達(174) 企業の再編成(174) 農村の変化(175) 国民生活の向上(175)	
xii 高度経済成長の実現	176
経済の回復水準(176) 経済自立計画から所得倍増計画へ(176) 技術革新の推進(177) 中小企業問題(178) 国民総生産(GNP)(179) 経済成長の背景(179) 転換期の農業(180) 開放経済体制への移行(181) 日本経済の性格転換(182) 物価問題(182) 経済大国の課題(183)	
参考文献	184
日本経済史略年表	192
索引	194

目 次

I-i-1	石器原石(黒耀石)の分布……6	II-iii-5	参勤交代と江戸・大坂・領 国間の経済関係……………62
I-i-2	弥生時代と古墳時代前期の 日本……………7	II-iv-1	大坂蔵屋敷の分布……………65
I-i-3	氏姓制度下の経営形態……………10	II-iv-2	江戸為替の取組機構……………66
I-ii-1	東西市の位置……………15	II-iv-3	近世の貨幣改鑄……………68
I-ii-2	皇朝十二銭……………16	II-iv-4	中井家の企業組織……………69
I-iii-1	東大寺の開墾状況……………18	II-v-1	正徳4年大坂移出入商品……………72
I-iii-2	興福寺荘園構成比……………19	II-v-2	米の流通経路……………73
I-iii-3	国別荘園分布……………20	II-v-3	堂島米市場の取引機構……………74
I-iii-4	荘園の土地構成……………21	II-v-4	金沢蔵の米切手……………75
I-iii-5	大乗院領大和国乙木荘……………22	II-v-5	福井藩の寛文札……………75
I-iii-6	荘園耕地の安定度……………22	II-vi-1	幕府直轄領の年貢収納総額 (米換算)と収納率の変動……………77
I-iv-1	阿豆河荘上村百姓等言上状……………24	II-vi-2	元文元年対大坂出荷商品数……………78
I-iv-2	地下中分図……………25	II-vi-3	大坂および江戸の米市場圏……………78
I-iv-3	畿内の商品流通……………27	II-vii-1	百姓一揆10年平均件数……………83
I-iv-4	年代別倭寇発生件数……………28	II-vii-2	天明5年以後の幕府俵物集 荷組織と集荷範囲……………85
I-iv-5	倭寇関係概要図……………29	II-viii-1	近世全国人口の趨勢……………87
I-iv-6	割符案……………31	II-viii-2	幕府公金貸付の機構……………88
I-iv-7	為替取組み図……………31	II-viii-3	堂島米市場における米価の 変動値と趨勢線……………90
I-v-1	惣の運営機構……………32	II-ix-1	大坂周辺国訴闘争の推移……………92
I-v-2	売券よりみた銭貨の使用比 率の変遷……………33	II-ix-2	江戸地廻り経済圏……………94
I-v-3	年代別土一揆発生件数……………35	II-xi-1	幕末期の輸出入額……………101
I-vi-1	戦国大名の出自と存続……………36	II-xi-2	安政以後における主要商品 の価格指数(I)……………102
I-vi-2	領国支配体制模式図……………37	II-xi-3	安政以後における主要商品 の価格指数(II)……………103
I-vi-3	信玄堤(竜王堤)平面図……………38	III-i-1	地租・小作料・農家収入対 照表……………110
I-vi-4	鉾山分布図……………39	III-i-2	国立銀行株主構成の変遷……………112
I-vi-5	天正金鉾断面図……………40	III-ii-1	通貨流通高実数……………114
I-vi-6	甲州法度の内容……………40	III-ii-2	生糸・茶の生産高および輸 出高……………117
I-vi-7	1450-1630年の物価の動き……………42	III-ii-3	主要商品輸入高……………117
II-1-1	河川堤塘工事年代別分布……………46	III-ii-4	産業別有業人口指数……………119
II-i-2	慶長3年、豊臣氏蔵入地の 配置……………48	III-ii-5	明治15年民間工場労働者内 訳……………119
II-ii-1	大名領地没収高……………51	III-ii-6	耕地および自・小作の状況……………120
II-ii-2	江戸時代の人口構成……………52	III-iii-1	工業生産額構成比……………122
II-ii-3	領国の流通機構……………54	III-iii-2	生糸生産量実数……………123
II-ii-4	敦賀・小浜より大津への交 通路……………55	III-iii-3	明治25年部門別民営工場数……………124
II-ii-5	日本人の南洋発展図……………56	III-iii-4	主要官営軍事工場と民営造
II-ii-6	諸国船日本貿易対照表……………56		
II-iii-1	全国総石高……………58		
II-iii-2	慶長小判・慶長丁銀……………60		
II-iii-3	敦賀入津高の推移……………61		
II-iii-4	江戸時代の海運……………62		

船機械工場の職工数……………	125
III-iii-5 貿易の推移……………	126
III-iv-1 円の為替相場……………	128
III-iv-2 紡績業確立期の設備・生産 ・輸出入……………	129
III-iv-3 輸出入額中内外商取扱高比 率……………	132
III-v-1 日露戦争後の経済動向……	134
III-v-2 主要産業生産力指数…………	135
III-v-3 外債現在高の推移…………	138
III-vi-1 第1次大戦中の経済諸指数	140
III-vi-2 貿易構造の変化……………	141
III-vi-3 第1次大戦中の海運概況…	142
III-vi-4 第1次大戦中の造船概況…	143
III-vi-5 第1次大戦中の紡織業……	143
III-vi-6 重工業生産額構成比…………	144
III-vi-7 第1次大戦中の農業生産概 況……………	145
III-vii-1 第1次大戦後の経済諸指数	147
III-vii-2 貿易数量指数……………	148
III-vii-3 合理化による原価切下げ率	149
III-vii-4 主要カルテル結成数の推移	150
III-vii-5 化学工業品目別生産額の推 移……………	151
III-vii-6 労働運動・農民運動の展開	152
III-viii-1 一般会計歳出入の推移……	154
III-viii-2 工業生産額構成比の変化…	155
III-viii-3 工業生産額の対前年伸び率	157
III-viii-4 財閥傘下重化学工業部門会 社の払込資本金額……………	158
III-viii-5 農産物価格指数……………	159

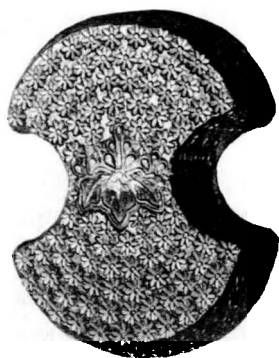
表 目 次

I-ii-1 律令体制による身分階級……	11
I-ii-2 律令体制下の中央官庁付属 工房……………	14
I-ii-3 律令体制による有位者（貴 族）の待遇……………	16
I-iii-1 墾田私有限度……………	17
I-iii-2 建保6年の太田荘内名田規 模……………	21
I-iv-1 問丸所在地……………	27
I-iv-2 日宋・日明・南蛮貿易輸出 入品……………	27
I-iv-3 時代別・地域別代銭納荘園 分布……………	28
I-iv-4 国別荘園市場……………	30

III-ix-1 軍事費の推移……………	160
III-ix-2 超重点部門の生産指数……	163
III-ix-3 労働力の構成比……………	163
III-ix-4 農業生産指数……………	164
III-ix-5 生活必需品の生産指数……	164
III-ix-6 物動貨物輸送量および保有 船舶の推移……………	165
III-ix-7 戦災被害状況……………	165
III-x-1 鉱工業生産指数……………	166
III-x-2 自小作別耕地面積の推移…	167
III-x-3 解体直前の財閥の各分野に おける地位……………	168
III-x-4 卸売物価指数……………	169
III-x-5 インフレーションの収束…	171
III-xi-1 鉱工業生産指数……………	172
III-xi-2 総産業資金および設備資金 の形態別供給……………	174
III-xi-3 農家経営形態の推移…………	175
III-xi-4 国民1人当り生活物資供給 指数……………	176
III-xii-1 戦前にたいする回復水準…	177
III-xii-2 新製品の出現による生産の 拡大効果……………	178
III-xii-3 技術革新中軸産業の設備投 資……………	178
III-xii-4 企業規模別賃金格差…………	178
III-xii-5 経済成長の国際比較……	179
III-xii-6 農業就業人口の減少……	180
III-xii-7 米穀需給関係の推移……	180
III-xii-8 耐久性消費財の普及……	181
III-xii-9 労働力需給関係の推移……	182

I-v-1 山城国上久世荘農民構成……	32
I-vi-1 後北条氏治下の貫高……………	38
I-vi-2 16-17世紀の世界銀・金平 均1ヵ年産出高……………	39
I-vi-3 楽市・楽座実施状況……………	41
I-vi-4 主要都市推定人口……………	42
II-ii-1 譜代・外様別大名転封回数…	51
II-iv-1 諸国問屋・船宿……………	65
II-iv-2 諸国専業問屋……………	65
II-iv-3 国別専業問屋その他……………	66
II-x-1 江戸中期以降の大坂への商 品廻着量……………	97
III-i-1 各地方の各種農産物の地位	110
III-ii-1 おもな官業払下げ実施過程	115

緒 言



太陽分銅金
法馬金。文禄一慶長初期頃。375グラム（三和銀行所蔵）

緒 言

実証史学の立場 歴史はたえず書き改められねばならない。歴史家もまた時代の子である。時代の意識によって制約される。新しい史料の出現によって歴史が補正される

ということのほか、に、時代の転換によって歴史は書き改められねばならない。戦後の歴史学が大きく転換したのは、まさにそのためであった。しかし、学問は客観性をもたねばならない。歴史学は客観的認識でなければならない。認識が客観的であるか否かは、アイデアによって事実をみるか、事実のなかにアイデアをみるか、にかかわっている。実証史学は後者の立場をとる。ただし、見る目が時代の制約をうけるから、あくまでも客観的な歴史というものはない。客観的な歴史は歴史的に展開する、といわねばならない。

われわれは実証史学の立場にたつものである。だから、既存の理論的枠組にこだわることなく叙述した。戦後、いろいろなニュアンスをもって、理論的枠組から歴史的現実を解釈し、理論の実証につとめる努力がなされた。それは高く評価されねばならない。われわれはそれらの業績から教えられることが多い。しかし、歴史はたんに理論の枠組にしたがって解釈するだけのものではない。理論は実存する歴史的現実を把握する手段である。

歴史的推移と 現代の意義 歴史的現実とはたえず動いている。時代から時代へと推移する。われわれはその流れをできるだけ明らかにしようとする立場をとった。そこで、全編を29にわけて、各時期のニュアンスを説き、その動きを跡づけることにつとめた。このような形で日本経済史を説くことができるのは、戦後、とくに個別研究がさかんになって、各時期についての研究が進んだからである。ただし、推移にあまりに拘泥すれば、激流にながされて、時代全体の姿の大きい動きをつかみえなくなる。そこに歴史叙述のむつかしさが痛感される。

日本は過去1世紀のあいだに急速な近代化をとげた。そのスケールと速さとは世界に例をみない。とくに最近の変化はめまぐるしいものがある。しかし、高度経済成長をとげた今日の社会を汚濁と混乱とにみちている、と指摘する人もあれば、輝かしい未来を期待する人もある。われわれが生きている現実の場は、はたしてどのような歴史的意義をもっているか。それは、けっして、せつかに求められるべきものではない。だから、本書は原初の時代から叙述をはじめた。ただし、われわれが生きている時代に先立つ幕藩制社会についてはかなり詳しく説くこととし、さらに、近・現代についてはいっそう多くの紙数を使い、できるだけ新しいところまで取扱うようにしたのである。

幕藩制社会と近代社会 歴史を学ぶことは「目ざめへの旅」にでることである。それによって、われわれは、われわれ自身を発見する。戦後、日本の封建社会についての研究が活発におこなわれたのは、近代的に生きるために克服されるべき対象として、封建制がとりあげられたのである。ところが、このような実践的な課題と歴史的研究との直接的な結びつきについ

て、反省がおこなわれ、やがてますます精緻な実証的研究が進められるようになった。幕藩制社会と近代社会とを安易に結びつけることはつつしまねばならない。幕藩制社会のなかに近代につながる要素や現象だけをみようとすることは、江戸時代をひとつのまとまった歴史的個体として認識することをさまたげる。一時代をつぎの時代の準備としてのみ見ることは誤りである。近代史学の父、レオポルド・フォン・ランケが、各時代は神に通ずる、といったのは、まさに真理である。

幕藩制社会は石高制を基礎とし、石高制は農業生産力に応じた年貢を賦課するための体制であって、商品・貨幣経済未発達ゆえに成立したものであるが、他方では、商品・貨幣経済の一定度の発展を前提としなければ存立しえない体制であった。このような矛盾する二面性のあることが幕藩体制の特色であり、近世という時代は、近代につながる面と中世につながる面とをもっている。

歴史における必然性と偶然性 明治維新を迎えて、日本は近代化のスタートをきったが、それが19世紀の後半であったことに重要な意味を見出さずにはいられない。当時は自由主義のはなやかな時代であったし、⁴先進諸国が産業革命を経ていたとはいえ、重工業は発展の緒についたばかりであった。帝国主義の圧力をうけはしたけれども、自由主義の風潮もつよく、求めるならば教えられるところも多かった。また、そのころの日本と欧米先進諸国との生産力の相違は、現代の先進工業諸国と低開発諸国との格差とくらべると、雲泥の差があった。だから、1世紀にわたる工業化の努力によって日本は追いつくことができたのである。また、戦後の復興・発展は世界の驚異とされているが、それも世界情勢の変化に助けられるところが多かった。国際的な冷戦の激化や朝鮮動乱の勃発などは、占領下にあった日本にとっては、まったく偶然の出来事であった。

歴史的現実の推移には必然的な展開があるが、それはかならずしも合理的な論理の道だけを歩むものではない。それぞれの時点において、いくつかの可能性のなかで、ある目的にしたがってひとつの可能性を選択することによって、展開の方向が決定されるが、選択する主体が、個人であっても、集団であっても、完全に論理的な合理性にしたがった判断をするとはかぎらず、とくに、それをとりまく環境には多分に偶然の契機がある。だから、また、過去の事実に対する反対の仮定をおいて論議することは、たんなる推論にすぎない。もしも鎖国をしなかったならば、近代化がより早く実現したかも知れない、というのは可能性であって、あるいは植民地化されていたかもしれないのである。人間の歴史にはいつも偶然性がつきまとうものである。

時代区分について 本書の時代区分は、古代、中世、近世、近・現代という日本史の一般的な時代区分にしたがった。西洋近代史学の伝統的な時代区分は古代、中

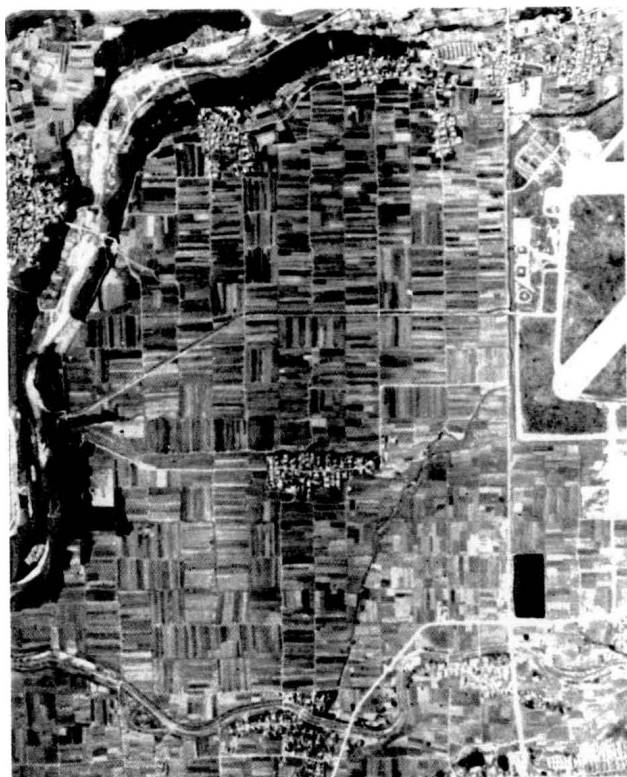
世、近代の3分法である。古代を否定して中世が、中世を否定して近代が、それぞれ生まれてくる、というのである。ところが、日本史では、とくに近世という時代を区切らねばならない。

それは日本の歴史的発展の特殊性からきたもので、すでに一言したように、近世は中世的要素と近代的要素とをもっている。その意味については本文でも説明したが、日本史の推移はすこぶる入りこんでいる。古代と中世とをいつから区分するかについても諸説がある。本書では、中世の始期を、班田制の廃絶によって律令国家体制が解体し、荘園が展開してくる時期としたが、その他にも守護地頭の設置とか、在地領主の抬頭などをとる説もある。つぎに近・現代というのは、もとより近代と現代とであるが、両者の接点についても多くの考え方があり、きまった見解はみられない。第1次大戦後、太平洋戦争後、サンフランシスコ条約締結後などが、現代の出発点をなすと考えられている。第1次大戦末期の1917年（大正6年）11月ロシア革命がおこり、君主制について、資本主義体制が打破されて、労農政権によるソヴィエト連邦が成立したが、世界史的にみればこの時期を現代の始点とする見方が比較的有力である。日本の近・現代は国際関係をはなれて論ずることはできないが、このころ、国内では工業化が進展し、軽工業に加えて、重化学工業の発展がいちじるしく、産業の基軸が多角化して、W.W.ロストウのいう成熟段階への移行が見られる。金融資本が本格的に成立し、日本も世界資本主義の一環として、いわゆる全般的危機の段階にはいることとなった。このようにして、わが国の現代史は経済の成長と矛盾の激化とのなかで開始されたのである。

経済史と政治史 経済史も歴史の大きな流れの一側面である。われわれは世の中で経済生活

文化史、その他 をいとなむだけではない。政治的にも、宗教的にも行動する。学問や芸術やその他の文化価値をもとめて生きる面もある。しかも、現実の世界はひとつである。しかし、人の行為の同形的な部分が結びあって、それぞれ相対的に独立した体系がみられる。ウィルヘルム・ディルタイはこれを文化体系Kultursystemとよんでいる。個々の人間はいろいろな文化体系の交点に立っている。学問が発達するにつれてそれぞれの文化体系を対象とする科学が分化独立して、経済学・法学・政治学等々の研究がおこなわれるようになった。そして、経済史学は歴史の全体の流れのなかの経済的側面を直接の研究対象とするものである。だが、歴史の現実のひとつの全体である。経済社会も他のいろいろな文化域Kulturgebietとの相関関係において認識しなければ、具体的な理解に達することができない。だから、経済史も、政治史・文化史・風俗史その他の歴史と切りはなすならば、抽象的なものになる。この意味において、あまりに経済史的な経済史は、生きた歴史的現実をつかみえない。われわれは、このような見解をもちながらも、紙数の制限にしばられて、本書では、政治史的ないしは法制史的な側面に多少ふれただけで終わっている。読者は他の文化域の歴史をも、すすんで渉獵されて、本書の叙述を補うようにされたい。

I 古代・中世編



摂津国島下郡・川辺郡の縫合地域条里制遺構
現豊中・伊丹・尼崎3市の接合点付近。右端に拡張前の大阪国際空港，左端に田能集
落と田能遺跡がみえる。上部をよこぎる川は猪名川。
(昭和30年4月林野庁撮影，承認番号46林野計551)

i 氏姓制度下の経済生活

原始共同体

日本にも、旧石器時代の文化があったことを、近年の考古学は明らかにしている。それは土器をともしない文化で、簡単な石器をつかって、採取・狩猟・漁撈をしていた時代である。このような低い生産力をもって、きびしい自然のなかで生きていくためには、集団生活をいとむほかはなく、個人はその一員としてでなければ生活できなかった。このような集団は生産や消費の管理主体であり、成員を結合している紐帯は共通の言語や共通の習慣であり、その基礎は生物学的ないしは擬制的な血縁関係であったが、一般には原始共同体とか、氏族共同体と呼んでいる。

旧石器時代は何万年もつづいたが、いまからおよそ9,000年ほど前に、日本の新石器時代ははじまった。新石器時代になると、石器のほかに土器や骨角器などがつかわれたが、日本では、土器の様式で、縄文時代と弥生時代とをわけている。前者の代表的な遺跡である貝塚からの出土品は、やはり狩猟・漁撈・採取が生産の中心であったことを物語っている。中期以降では原始農耕が発生した、とする見解が多く、末期には大陸から渡来した稲の栽培が定着した、とみる見解もある。ただし、原始共同体的な生産関係や社会関係にあったことは変わりが無い。原始共同体では自給自足が原則であったが、生産物の交換もおこなわれていたと推定される。図 I-i-1 は、石器の原石である黒曜石の分布をしめしたもので、産地を中心としてかなりひろい流通圏の形成がみられる。

紀元前2・3世紀から、弥生時代にはいるが、中国大陸からかなり高度な文化がもたらされ、紀元1・2世紀までのあいだに、しだいに西日本から東日本へと発展した。この時期の重要な特徴は、稲作農業がさかんになったことである。そして、青銅器が出現して、金石併用時代になり、工作技術がすすんで、ある程度の専門化がみられた。したがって、贈与・献進ないし略奪の形で、財が一方的に移転するほか、物々交換がおこなわれたものとおもわれる。大陸からの金属器の伝来は、国外との交換もおこなわれていたことを意味する。他方、貧富の差、身分

図 I-i-1 石器原石(黒曜石)の分布



注：『図説日本文化史大系1』（赤堀英三作成）による。

の差も、出土品から識別されるが、水田耕作の発達は共同体の重層的構成をもたらしした。共同生活の基盤として氏を単位とする集落が、農耕経営に便利な低湿地に近いところでき、「むら」と呼んでよい形態をもつようになった。農地は「むら」の総有であった、とおもわれる。大きい氏は数個の「むら」

にわかれていたが、氏と氏とを連結する社会集団として、部族的結合ができ、それは「くに」と呼ばれる原始小国家であった。『前漢書地理誌』に、「それ楽浪海中に倭人あり。分れて百余国となる」と記され、記紀にも小国分立をおもわせるような記事がある。ところが、弥生時代の中頃になると、これらの原始国家がしだいに連合体をつくるか、または強大なほうに併合されはじめ、部族連合国家ないしは部族複合国家への動きがはじまった。

大和朝廷による考古学的には、3世紀末から古墳時代にはいるが、そのころから、部族複合統一と氏姓制度 合国家群は、まず大和国家・出雲国家・九州国家に大きく統合され、やがて大和朝廷によって統一されていく。3世紀後半、「ハツクニシラスメラミコト」と呼ばれた崇神天皇のころから統一がはじまり、応神天皇にいたってほぼ全国土が大和朝廷の治下にはいった。図1-i-2は、中国の古典にでてくる重要記事の年表であるが、はやくから大陸との交渉があり、国際関係を契機として、国内の統一が進行した。

大・中・小さまざまな「くに」を統合して、統治するにあたって、大和朝廷は、中世の用語でいえば、本領を安堵する仕方に似た方法をとった（23ページ）。だから、主権は分割されて、原始封建制に近い統治形態になったが、その内部では、行政組織として氏姓制度が成立した。氏はなお氏族共同体としての性格をもち、大和朝廷は氏土を通じて支配したが、その氏土に朝廷における地位や役職の序列をあらわす姓をあたえた。姓には、別・臣・連・君（公）・造・史・直・首などがあり、氏の名とつらねて、蘇我臣・大伴連というように呼ばれた。とくに臣・連がもっとも尊く、中央政府に列するものは大臣・大連といい、最高の姓とされた。姓をあたえられるのは氏土ないし有力氏族の氏人にかぎられ、世襲が普通であった。そして、一定の姓の所有者でなければ、一定の役職につくことができなかった。

労働の編成 姓をもつ人びとは、貴族であって、管理職的労働にたずさわるが、労働に従事することはなかった。貴族以外の人民は、自由民・半自由民・不自由民の三部類があった。自

図1-i-2 弥生時代と古墳時代前期の日本

